

大分県立看護科学大学 第1回看護国際フォーラム

「自律した看護実践にむけての教育」(Dr.Madeline A.Naegle の講演から)

豊澤 英子 Eiko Toyosawa, Ph. D., R. N.

大分医科大学医学部看護学科 地域・老年看護学 Oita Medical University School of Nursing

2000年2月21日投稿, 2000年5月1日受理

キーワード

自律、上級臨床看護実践、臨床的意思決定、専門職業意識、役割の社会化、大学院教育

Keywords

autonomy, advanced clinical practice, clinical decision making, professionalism, role socialization, graduate programs in nursing

はじめに

10月9日に開催された国際フォーラムは、アメリカ合衆国と韓国の看護や看護教育の最新情報を得ることのできた貴重な機会となった。10年ほど前にアメリカ合衆国で学び、現在、学士・修士課程教育に携わっている筆者にとって、看護専門職育成における「自律 Autonomy」は常に教育の中心課題であった。そのような点からも、マドレイン・ネーグル博士の講演は特に興味深いものであった。ネーグル博士の講演内容の焦点は、自律的な看護実践に向けての基礎教育及び大学院教育(特に修士課程)のあり方、社会における看護婦と看護専門職団体の地位向上、の2点に大きくまとめられよう。まず、これらについてネーグル博士の講演内容を紹介し、最後に日本の看護教育への示唆について述べてみたい。

自律的な看護実践を促進するための看護教育のあり方

まず、ネーグル博士は、自律した看護実践のためには教育的準備を戦略的に計画していくことが重要であると主張した。アメリカ合衆国において、看護職になるためのプログラムは多様であり、キャリア開発の道が開かれ、実務看護婦課程から登録看護婦課程(ディプロマあるいは学士課程)、準学士課程から学士課程、その他の学士課程から看護の大学院へ進学など、その選択肢は多い。しかし、それは一方では「専門職としての看護」に対する社会のイメージも一定ではないことを意味する。看護の役割を社会に正しく認識してもらうことが看護の自律性を確立するために重要であり、より新たな見通しをもって物事を変革することのできる看護職の育成が求められている。その第一段

階として、看護の基礎教育を検討する必要があるという。

ネーグル博士は、看護の学士課程は基礎教育全体の約4割程度であり、自律した看護実践を目指すためにはいまだ十分ではなく、カリキュラム開発や教育の充実といった点に関して、以下のような課題があると指摘した。

- 1) 看護教育は、社会の人々が抱く看護への態度、伝統、期待される役割をしっかりとらえながら変化していく必要がある。
- 2) 自律的な看護と看護教育を目指すためには、看護の社会的地位の向上に視点をおいたアプローチが求められる。
- 3) 熟練した実践を提供するためには、臨床的意思決定能力を育てていくことが大切であり、そのコアとなる教育内容として「クリティカル・シンキング、総合的なヘルス・アセスメント、看護倫理、ヘルスケアにかかわる他の専門職との対等な関係づくり」が重要である。
- 4) 専門職業意識を育てるためには、看護倫理に焦点を当てる必要がある。
- 5) 知識と実際の生活経験を統合するためには、地域を中心とした学習をさらに促進していく。

また、自律的で高度な看護実践の入門レベルとして、ネーグル博士は大学院修了をあげた。アメリカ合衆国では、看護の修士課程の目標は、初期においては教育者・管理者養成であったが、1960年代になると臨床を志向した専門家養成へと変化した。その後、上級

臨床看護実践(Advanced Clinical Practice)のプログラムが急速に増加し、クリニカル・ナース・スペシャリスト(CNS: clinical nurse specialist)やナース・プラクティショナー(NP: nurse practitioner)の資格をもつ看護職が高度な実践を提供するようになった。ネーグル博士は、高度の看護実践を行うために看護職に求められるものは、包括的な看護アセスメント能力、高い自律性、専門的知識、臨床における系統的な意思決定能力、臨床的役割に教育・研究能力を統合する力、他の専門職や同僚との協働関係を構築する能力であると強調した。

さらに、フィジカル・アセスメント、診断理論、健康問題の管理、システムへのフォーカスの4点に言及し、それらについて学士、CNS、NPの技能を比較し、その違いを明らかにした。学士課程では、看護の概念枠組みに基づいて看護過程を展開し、看護ケアに焦点がおかれていた。CNSの技能が専門分野に限局し、その焦点が対応や相談におかれていたのに比し、NPの技能は包括的で、その焦点は個人および関連するものにおかれていた。ヘルスケアシステムの中で、これら大学院レベルの看護職が、上記の技能を發揮し、その成果を社会に明らかにしていくことが求められていた。

社会における看護職の地位向上

もっとも心に残ったネーグル博士の言葉は、「看護婦がもっと自律的に職務を果たせば、社会の人々の看護についての考えや態度は変わる。」であった。一人ひとりが専門職業人として、いかに自らを律し、その考えを他者に伝えていくか、高度な実践力を示していくかを投げかけるものであった。ネーグル博士は、他のヘルスケアにかかわる専門職と共に平等な関係で機能することの重要性を、種々の側面から指摘した。アメリカ合衆国の場合は、上級の看護実践に関する業務法の変更、開業権や処方権の獲得などのために戦ってきた歴史をもっている。州毎に看護専門職団体のおかれた状況は異なるが、共通して言えることは人材は豊富、組織力は強靱ということである。連邦政府あるいは州政府の医療政策や医療経済、看護専門職団体と医師会との関係性など、上級看護実践プログラムの発展には様々な要因が関連しているが、ネーグル博士は、人材・組織力を活かした戦略的な方策を実践していくことが重要であると述べた。さらに、「これからは、今日の看護婦(modern nurse)についての情報をもっと一般市民に伝えよう。」と訴えた。アメリカの看護が

絶えず社会へその役割を示してきたことを印象づける言葉であった。専門職として21世紀を予測し、変化・改革に対応するためには、進取の精神と実行力が求められることが力強く伝わってきた。

日本の看護教育に示唆されるもの

21世紀を目前にして、日本の社会は大きく、そして早いスピードで変化している。看護専門職として求められるものは、時代・社会の変化や人々のニーズに柔軟に対応できる能力、問題と解決策を論理的に引き出す力(論理的思考)そして実行力(責務も含めて)といえよう。110数年の看護教育の歴史において、臨床に優れた看護職は育っても、社会のあらゆる場でリーダーシップを發揮する看護職はなかなか育ってこなかったのではなからうか。そう感じているのは筆者だけではあるまい。看護職個々の能力というよりも、自律した仕事の仕方、組織能力、管理能力や人間関係の構築能力などを、教育、実践のいずれの場も十分に培ってこなかったことがその要因といえる。専門職として機能するためには、自律性の確立が大きな課題となる。ネーグル博士が述べるように、まず第一段階として、学士課程教育が重要と考えられる。

ここで、アメリカ合衆国と日本の教育の違いについて少し触れてみたい。筆者の経験では、アメリカ合衆国の学生は自己の意見を述べ、教師によく質問をする。小・中・高等学校の教育を通して、自分の考えをハッキリと相手に伝えることを既に身につけているが、大学においてさらに主体的かつ積極的な学習姿勢を育てる。例えば、授業が始まる前に早々とやってきて、廊下でテキストや文献を読んでいるし、昼休みの間もサンドイッチを片手に午後の授業の準備をしている。夜も寮の学習室やコンピュータ室は学生で一杯である。日本の学生で「大学での学習の成果は自分の責任と自律による」と考える者はどのくらい存在するであろうか。こういった背景の違いを知っておくことは、「自律性」を考える上で参考になるであろう。

顕在・潜在カリキュラムを通して、我々は学生の自律性をどのように養っていけばよいのだろうか。カリキュラムの構造とコア、教育技法と評価、学生-教師関係、卒後教育との連携など、多様な視点からの検討が必要であろう。また、看護カリキュラムの構築に関して言えば、看護の役割を社会に明らかにするための教育要素が十分に組み込まれているとは言い難い。専門職業人としての意識を育てるためには、ネーグル博士が述べるように、看護倫理と意思決定能力に焦点を

当てた教育が重要になると考えられる。

アメリカ合衆国の看護カリキュラムは、看護専門職団体による評価を受け、改善を繰り返すことにより発展してきたと理解しているが、今なおその努力が続けられていることがわかった。1990年に筆者が実施した調査において、全米看護連盟(National League for Nursing)に認定された39校の看護大学長あるいは学部長は、大学院教育の第一義的目標として「自律性とリーダーシップ」をあげた。ネーグル博士の講演より、過去10年間の大学院教育がまさに上記の目標を実現するために前進してきたこと、そして、より質の高いサービスの提供を目指してチャレンジし続けていることを、改めて実感した。

おわりに

看護と社会との関係を私たち看護職はよく言葉にするが、看護の広報活動については日本では未だ十分とはいえない。これからは、特に地域に根ざした広報活動が、人々に看護や看護職を理解してもらうために有効と考えられる。多くの人々が看護に関心を寄せてくれるように、そして、将来を担う若者の中から一人でも看護を目指そうとする人が現れるように、地域社会に働きかけていきたい。さらに、我が国においては、学士課程教育が急速に進んでいるとはいえ、現時点でその学生数は全看護学生数の10%程度にしか過ぎない。大学教育は、上級看護実践の入門レベルとしての位置付けをもっており、今後もその充実を図っていく必要がある。

アメリカ合衆国と日本の教育制度や看護の立場の違いはあっても、看護職の地位を向上させていくことは共通の課題である。本講演の内容は、課題の達成に向けて大いに参考になるものであり、大学・大学院レベルの看護職の役割と方向性について考える良い機会ともなった。

著者連絡先

〒 879-5593
大分県大分郡狭間町医大ヶ丘 1-1
大分医科大学医学部看護科
地域・老年看護学
豊澤 英子
toyosawa@oita-med.ac.jp